



神聖かまってちゃんとオズの魔法使い
——臆病者に残された世界を討つこと

作家の中島らもはミステリーを書けといわれて、「んなもん書けるだろう！どれだけ本を読んできたと思っているんだ」といったけど、まったく書けなくてどんどんお酒を飲んでいたらアルコール中毒になったという。

自分にとっての「なにか」がクラスメイトを見下すための「なにか」、たとえばクラスから孤立してしまい自分はもう消えてなくなりたいと思ったならば惨めすぎる自分自身に「なにか」を与えなければならない。そうしないと惨めすぎて死んでしまうからだ。

人間にプログラムされた生の執着である。自分の「なにか」で他人を見下すことが大事だ。それをしなければ、人は生きることができない。

じつはこれ、まったく意味がわからないという人がいる。いままで自分がアウトサイドになったことがない人間、そういう自覚がない人間、ものを考えない人間だ。映画『桐島、部活やめるってよ』に描かれている。

そういう人間は「わたしたちは仲良いクラスだったよねー」と平気で口にする。傍らで耳にするたびにわたしたちが含まれていないことを実感してしまう。かれらにとってわたしたちは空白な存在なのだ。

ここで自分にとっての「なにか」があれば、…ま、いーんですけどね。とってしまえる。

たとえば、大槻ケンヂはエッセイのなかで「死にたいなら本を100冊読んでからにしよう」といつている。そうすれば「わたしは本を100冊読んでるんだぜ」とクラスメイトたちを見下すことができ、自分がいくらかすごい人間になった気になり、死ぬのを止まることができるといっている。



わたしも高校のときはこのクソどもがわたしは本を読んでやるわ、と思い、テレビで芥川賞作家「綿矢りさ」がすこし前に話題になっていたことを思い出して『インストール』や『蹴りたい背中』を読んだ。

しかし、運命の巡り合わせていうものがあるのだろう。まったく面白くなかった。わたしは本を開いている手をとっととページすっ飛ばして本を閉じたい、読むのを辞めたい、という衝動にかられた。

自分にとって面白くないものを永遠とも思える時の長さ体感し続けるのは、地獄の業火に背中をあぶられているような感覚である。これを経ればわたしは何か得られるかもしれないという希望の意志と、もうダメなんじゃないかダメだろうこれはわたしにとってダメだったんだという絶望の意志が、電車に乗ってる女子高生の伸ばした足のローファーが右から左へいたり来たりするように揺れ続ける。でも、電車に乗っているかぎりはいったり来たりしている意志とはきりはなされて終点駅まで走り続けている。

わたしたちは仲間がいる者とちがって孤独な旅だ。



「寒いね、といえば、寒いね、とかえってくる暖かさ」

俵万智はそういった。

わたしたちにはそれがない。そもそもガイドもいなければ、「寒いね」といえばかえってくるそれもないので自分の意志を人を通して確認することもできない。そういう孤独な生き方をしている。

ある人はそれをみて「孤独が好きなんだね」と思うだろうが、そうではない。わたしたちは孤独を選択したのではなくて、孤独になるという選択肢しかなかったからそうになっているだけなのだ。それを理解してないから平気でそんな残酷なことを云えるのだ（わたしたちみたいな人にとっては残酷なことばです）。

たしかに、机の上に音楽雑誌のバリケードを広げて「おまえらがしゃべりたいんならしゃべってもいいんだぜ？」というひねくれた精神の者を扱うほど皆は暇ではない。

こんな小さいところをみつけてここまで読んでいるなら悪いことではない。人としゃべることだけがコミュニケーションではないからだ。表現はかならず製作した人間の意志が通っている。作品の奥には人がいるのだ。表現をじぶんにあてるということは人とコミュニケーションしているということなのだ。人と会話なんてしなくていいのだ。



とはいえ、わたしたちは会話がきらいなわけではない。むしろ好きだ。でも人を不快にさせてしまうと悪いと思ってしまい、偽りの会話をしている自分がしだいに嫌になっていく。だから、会話自体は嫌いではないはずだ。それによって起こる心の擦り切れに自分が耐えられなくなってしまうから人と離れてしまうはずである。

うまく会話できないと思っているだけなのだ。好きな話題ならどれだけでもしゃべれるし本当はしゃべりたいはずだからである。足りないのはコミュニケーションする自信だ。

オズの魔法使いという物語がある。願いを叶えてもらうために魔法使いに会いに行くという話だ。

ブリキの木こりは心ももらいに、周りとくらべて弱いライオンは強くしてもらうために、主人公のドロシーの旅についていく。

ライオンは自分が弱々しいという悩みを魔法使いに話すと、あなたは元々強いと予想外のことをいわれる。そして、「勇気が足りないだけだよ」と魔法使いはいった。

人というものは、人と会ったときに、どうしても「怖い」と思ってしまう習慣を持っている。警戒心のようなものだ。

作家の海猫沢めろんはその「怖さ」をこう解釈した。

「自分が見下されるんじゃないか」、「ぼくは変なやつだと思われているんじゃないか」とか「心の中では、ぼくのこと、嫌いなんじゃないか」とか、動物的に品定めされている感覚なのではないか。そういつている。

その通りだと思う。



さまざまなバンドが毎年出てくるが、なんだかみんな強そうである。弱さを吐露しているものもたしかに多い。しかし、それをみててもにじみ出る強さ。それを感じるたびにげんなりしてしまう。

そんななか、神聖かまってちゃんはちがった。かれらは弱い。弱いけどふしぎとずっと見ていたくなる。それは、かれらが臆病者のジャンプをしているからだ。



なんだかんだ強そうなバンドたちのジャンプは見ていて寄り添えない。臆病者たちが冷や汗だらだらかきながら、足もガタガタ震えながら、それでもない勇気ふりしぼって飛ぼうとしているその姿こそすばらしいのだ。その姿にはどんな重厚なロックバンドも勝てない。

臆病者がする表現こそ世界にとって価値がある。0から1踏み出すのはとてもつらい。しかし、そこにこそみんなが感動する表現のダイナミズムがある。それを意識的でないにしろも本能のレベルで分かっているのが神聖かまってちゃん好きである。

神聖かまってちゃんに心惹かれる者は他の者よりよっぽど表現の本質をわかっている。だから神聖かまってちゃん好きは強い。←

うおお

神聖かまってちゃんとオズの魔法使い ――臆病者に残された世界を討つこ
と

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ